

### 第3回『戦争体験談語り継ぎ部養成講座』 山本 安彦 氏(H25.12.24)

#### ～昭和18年当時の小学校初等科の教育の内容・海軍志願の動機・

#### 終戦前後の学校教育と社会全体の状況について～

私は繁昌町に住んでおります山本安彦です。現在、呼疑原神社で神主をしております。

私は、昭和6年1月生まれ、ちょうど83歳です。戦争体験といえばほんとに少しだけしかなく、終戦のとき私は旧制中学3年生でした。初めに私の経歴を話させていただきますと、昭和20年4月ごろ、中学校へさかんに軍隊への勧誘がございました。

私もいろいろ考えたのですが、昭和20年の4月に当時の商船学校へ入りました。商船学校へ入りますと海軍へ軍籍に編入されまして、海軍予科練習生という海軍であることと同時に商船学校の生徒でありました。商船学校というのは、航海科と機関科があります。エリートの子は航海、例えば船長とか、艦長になる。私は2番手でしたので、機関科でした。私はちょっと不満だったのですが、仕方がありませんでした。機関科の生徒で8月に終戦を迎えました。終戦後は軍籍がなくなりました。機関科の生徒では商船を卒業しても船長にはなれませんので、10月にやめまして、また旧制中学のものの学年にかえりました。

今日、資料としてお持ちしたのは、昭和18年文部省が発行しました当時の小学校国民学校の教科書「初等科国語の6」です。

もうひとつは、靖国神社に祀られています英霊の遺書「私が死んだら」「お母さんの夢をみました」。それから、「大好きなおかあさん」「よき同伴者を求めてください」の4つです。当時の若い学徒はどういう気持ちで国家を考え、そして死んでいったのかというのをもう一度再確認したいと思ってまいりました。

「私が死んだら」は28歳の陸軍少尉の遺書です。

「私が死んだら 私は青い草のなかにうづまり こけむしたちひさな石をかづき 青い大空のしづかなくものゆきかひを いつまでもだまつてながめてあやう。それはかなしくもなくうれしくもなく 何となつかしくたのしいすまひであらう。白い雲がおとなくながれ 嵐が時にうなつて頭上の木々をゆすぶり ある朝は名も知らぬ小鳥来てちちとなき 春がくればあかいうら青い芽がふき出して 私のあたまのうへの土をもたげ わたしのかづいてある石には 無数の紅の花びらがまふであらう。そして音もなく私のねむる土にちりうづみ やがて秋がくると枯葉が日每一面にちりしくだろ。」

とあります。非常に文学的な遺書ですけれども、最後に「一ねがはくは 花のもとにて 春死なん そのきさらぎの もち月のころ」とあり、これは西行法師の歌で、この人の生命観を非常に表しています。

これを全部見ますと、当時の若い兵隊たちが何を考え、何を求めて死んでいったのか、ということが分かるのですけれども、こういうものを通して、靖国の英霊というものをいつまでも継承し、お祀りしなければいけないと思っているわけであります。

戦後、みなさんご存知のとおり、戦争のことを第2次世界大戦、太平洋戦争、大東亜戦争、といろんな言い方をしますね。この第2次世界大戦という呼び方は、ヨーロッパ欧米側から見た歴史観を表しています。アメリカが日本に押し付けた、アメリカの歴史観によるところの戦争の呼び名は太平洋戦争なのです。そして日本政府が正式に発表しました呼び名は大東亜戦争です。私は一貫して大東亜戦争という名称を使っております。つまり、アジアの中で欧米の支配を受けていなかった国は、日本とタイ国だけなのです。あとはすべてヨーロッパの国々、欧米の国々の植民地支配を受けていたのが現実であります。だから、アジアを開放するとい

う目的を持った大東亜戦争というのが、日本政府の当時の発表した政府の歴史観に立つ言い方だと思っております。

そして、アメリカの植民地政策で、「世界の中で最も野蛮なことをしたのは日本の軍隊だ」とありもしないことを、戦後昭和20年から今日まで、歴史のあらゆる教育の中でふきこんでいるわけです。だから、多くの日本人が、日本の軍隊というのは非情なことをしたというふうに思っているのですけれども、私は世界の中で、日本の軍隊というほど規律も正しく立派な軍隊はないと思っております。

その一つの証が、今日配っております初等科国語で、小学校6年生の教科書です。この教科書の中の「十 不沈艦の最期」をご紹介します。プリンスオブウェールズとレパルスというイギリスの不沈戦艦を日本の航空隊が初めて雷撃をして沈めるのです。飛行機の攻撃によって軍艦を沈められることを当時世界で初めて実証したわけです。その実証した日本は、最後はまた航空機によって、敗戦に追い込まれた皮肉な運命をたどるのです。この文章の最後に書いてありますように、プリンスオブウェールズとレパルスが沈んだ海を日本の航空機が訪れて花束を投げ、そして「敵ながら、最後まで戦い抜いた数千の霊よ。静かに眠れ。」と言います。教科書で、いわゆる武士道精神を広めました。

次は乃木將軍とステッセル將軍の会見で、「乃木將軍が敵將さんを武士として扱った」という武士道精神、これが当時の日本の教育だった。だから決して「死ねとか、天皇陛下のためになんとかせいとか、国のために死ねとか」ではなくて、「人間としての立派な生き方をしなさい」とそういうことを教えられていたのが、当時の教育でなかったか、そういうふうに私は思っています。

わたしよりお年を召されたかたは、安富さんだけでしょか。他の方、水師營をご存知ですか？  
(受講生)「聞いたことはあります」

次は、「十二 水師營」です。これは非常に立派な文章だと思います。当時、日本というのは小学校教育にもものすごく重点を置いていたのです。戦後日本がいち早く復興したのは、この小学校時代の義務教育、基礎教育がいかにこの充実した立派な教育だったかという一つの証だと思います。

83ページを読んでみましょう。ご存じなのは、安富さんだけでしょか。ほかのかたは初めてですか？

乃木將軍というのはご存知ですか？二百三高地という旅順の要塞を日露戦争の時に攻撃をします。ロシアの艦隊が非常に勢力を持っていますので、どうしても旅順を落とさなければならないところが二百三高地です。当時のロシア軍というのはそこに要塞を築いて機関銃を持っていたのです。セメントの要塞で、日本は何万という兵隊が死傷するわけですが、最後は軍艦に積み込んだ大きな大砲を外してそれで攻撃をして、旅順、二百三高地を落としたわけなんです。

安富さん「わしな、ちょうどハルピンにおってな、兵庫県の人が病死した。そのお骨を納めるために旅順まで行って、ところが、いっぱいやからな、大連まで行ってくれ言われて、大連行こうおたら一日2回ほどしか汽車が通れへん。それ待ったつたら夕方になってもた」

それでは、85ページを開けて頂けますか。明治38年の1月5日に、ステッセル將軍が降伏を申し入れます。そこで、明治天皇がこういうことをおっしゃるのです。

「敵將ステッセルより開城の申し出でをなしたるおもむき伏奏せしところ、陛下には、將官ステッセルが祖国のために盡したる勲功をよみたまひ、武士の名誉を保持せしむることを望ませらる。右つつしんで伝達す」というふうに、いわゆる明治天皇のお心をお伝えする。つまり、ステッセル將軍を、敗軍の將にするのではな

く、ただ立派な相手の指揮官、武士の名誉として対決するということなんです。

次89ページをあけてもらいますと、ステッセル将軍と乃木大将が水師営会見所というところで会見をします。そこで乃木将軍がこういうことをいうわけなんです。「祖国のために戦っては来たが、今開城に當(あた)って閣下と曾見することは、喜びにたへません。」

二百三高地の攻撃で、乃木将軍は2人の息子、それぞれ長男と次男が戦死するわけなんですね。勝典(かつすけ)、保典(やすすけ)が弾にあたって戦死した。そこでステッセル将軍が、こういうことを言うわけなんです。「承りますと、閣下のお子様が二人とも戦死なさったそうですが、お気の毒でなりません。深くお察しいたします」「ありがとうございます。長男は南山で、次男は二百三高地で、それぞれ戦死をしました。祖国のために働くことができ、私も満足ですが、あの子どもたちも、さぞ喜んで地下に眠っていることでしょう」

ステッセル将軍が「二人の息子が戦死されてお悔やみ申し上げます」と言いますと、乃木さんが、「私も満足ですが二人の息子も喜んでくれるでしょう」と話されました。いろんな話をしながら別れていくんですけども、いわゆる武士道精神、相手をお互いにたたえる、こういうことが教科書に掲載され、当時の小学校で教育されました。

それと次の58ページの「不沈艦の最期」ですけれども、この大東亜戦争が始った時に世界で沈まない、どんなことがあっても沈まない軍艦と言われていた、イギリスの戦艦のプリンスオブウェールズとレパルスの2隻の戦艦を日本の航空隊が最後は撃沈をするわけなんです、72ページ「それから3日目、われわれの一隊は、もう一度あの戦場の上空を飛んだ。直下には何事もなかったように、青い波頭がかがやいていた。この波頭へ向けて、大きな花束を落とした。『敵ながら、最後まで戦い抜いた数千のみたまよ。静かに眠れ。』といふわれわれの心やりであった。」

こういうのも武士道精神だと思います。私たちは戦時中こういう教育を受けておりましたということを若い人に知ってもらいたいと思います。

武士道精神とはどんなものかと言いますと、教官・先生の半分は海軍士官でしたので、「無駄に死ぬな。あくまでも生きる事を考えよ」という教えの中で、戦局悪化の中にあっても、日本の国民全体が飢えている時でさえ、敵捕虜にも待遇は日本の将兵と同じく食料も供給し、同胞を殺した憎い敵に対しても、礼節をわきまえ敬うよう教え込まれていました。これが日本の武士道精神です。

軍人勅諭をご紹介します。

ひとつ軍人は忠節を尽くすを本分とすべし

ひとつ軍人は礼儀を正しくすべし

ひとつ軍事は武勇を尚ぶべし

ひとつ軍人は信義を重んじるべし

ひとつ軍人は質素・儉約を旨とすべし という内容でした。

私は、昭和20年に旧制中学校を卒業しました。高等学校は全国で25か所ありました。ここから近い場所を挙げますと、京都や姫路があります。士官学校は、今で言うところ京都大・東京大にストレートで合格できるようなものでした。大学は、神戸経済大学・関西学院大学、当時兵庫県では2つしかありませんでした。他の当時の進学先ですが、神戸医学専門学校・私が進学しました師範学校、高等師範専門学校。これは主に、岡崎・筑波・広島にありました。奈良女子高等学校師範もあります。他に、専門学校もありました。神戸工業専

門学校・姫路工業専門学校や、各部門に分かれた専門学校。北条高等女学校も、後に北条高校となりました。旧制中は、小野中、現小野高校のことです。姫路中は、現姫路西高校のことです。中学校の時の教練、軍隊の中が徴兵に適用されます。下士官適任がそうです。

陸軍士官学校は、陸軍の士官を養成するための学校です。士官は、下士官兵と異なり、特別の権限・責務を有しているため、特にこれを教育するための学校として設けられたのです。体力と愛国心と智力を兼ね備えた人の集団ですが、出来る者はどんどん登用していけるし、能力の差によって分けられる厳粛な学校でもありました。今の社会も、出来る者と出来ない者で学歴や仕事・収入などに差があり厳しいですが、戦争当時だって、今の社会のような、それ以上の厳しい社会・学校の制度がありました。